ホステリングマガジン vol.29 / 2022 Summer

JAPAN Youth Hostels, Inc.

Hostelling Magazine

Cover Interview

嵐 莉菜

見過ごされる世界の問題 —
身構えず、知るきっかけに。

この冊子は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。

あなたに夢を、街に元気を。
クーちゃん 宝くじ

ヤマザキ
やっぱり私は、
ランチパック！
ヤマザキ
ランチパック
たまご
ヤマザキ
ランチパック
ピーナッツ
ヤマザキ
ランチパック
ツナマヨネーズ
小芝風花
meets
ランチパック
おいしいマイスタイル
ランチパック

72 Internationale Filmfestspiele Berlin Generation

第72回ベルリン国際映画祭
ジェネレーション部門正式招待作品
アムネスティ国際映画賞
特別表彰

arte KINO INTERNATIONAL

第23回釜山国際映画祭
ARTE International Prize
受賞

「国籍」「民族」という重い言葉を背負い、
クルドの少女は懸命に生き、希望を探します。
ラストシーンは静かで美しい。
世界で国を失った人達への希望の伝言になるでしょう。

——武田鉄矢（歌手・俳優）

もし私の横に彼女がいても、お金を渡したり、
ご飯を作ってあげることしかできないだろう。
そう思うととても情けない気持ちになった。
でも、スクリーンの中の彼女とともに心の底から絶望し、
涙することは自分の中に無意識に存在させている
「差別」を見つける第一歩だと思った。

——石橋静河（俳優）

自由な高校生活から、数々の制限をかけられた生活へ。
「ごく普通」が豹変する様子は日本における
難民問題を知る一助になるだろう。
それでも友情や進路問題、恋がある。
青春のきらめきは境遇の苦さに勝るのだ。

——今日マチ子（漫画家）

みずみずしい恋の風景がある。
しかしみずみずしい恋だけでは、何も解決し得ない。
異邦の少女に惹かれるこの国の心優しい少年は、哀れなほど無力だ。
少年の無力は私の無力であり、
この映画の中で最も重たい問いかけなのではないかと思う。

——西川美和（映画監督）

ここに居たいと
願うことは
罪ですか？

『万引き家族』×『ドライブ・マイ・カー』のスタッフが贈る

国境を越える感動作

マイスモールランド

WELATÊ MIN E BIÇÛK

嵐莉菜　奥平大兼

アラシ・カーフィザデー　リリ・カーフィザデー　リオン・カーフィザデー
韓英恵 吉田ウーロン太 板橋駿谷 田村健太郎 池田良 サヘル・ローズ 小倉一郎
藤井隆　池脇千鶴 / 平泉成

監督・脚本：川和田恵真
音楽：ROTH BART BARON　主題歌：「New Morning」

製作：「マイスモールランド」製作委員会　企画：分福　制作プロダクション：AOI Pro.　配給：パンダイナムコアーツ　共同制作：NHK　FILM-IN-EVOLUTION
©2022「マイスモールランド」製作委員

絶賛
公開中！

こどもはおとなに。
おとなはこどもに、
なれる場所。

日本ユースホステル協会は日本国内にユースホステルを設置・運営すると共に、国際ユースホステル連盟（Hostelling International）や各国のユースホステル協会と協調し、知見を広める「旅」を促進する活動を行っています。

※本誌の情報は2022年6月20日現在のものです。
変更になる場合がありますので、お出かけの前に現地にお確かめください。
発行所 一般財団法人日本ユースホステル協会
編集・発行人 寺島 眞
TEL. (03)5738-0546
〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1
国立オリンピック記念青少年総合センター内
※本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

Line up

02 Cover Interview
嵐 莉菜
見過ごされる世界の問題――身構えず、知るきっかけに。

08 Youth Hostel Pick up
リフォレ積丹ユースホステル
旅の魅力を最大限に引き出してくれるユースホステル

12 Hostelling Magazine × 地球の歩き方
各国の朝ごはんを知ろう！
世界の朝食 WORLD BREAKFAST

15 FYI, from HI-Office

16 LiLiCoの映画で世界を旅しよう！

17 おしえて! 旅GIRL

18 松鳥むうの晴れときどき旅びより

20 YH-GUIDE ユースホステルガイド
北海道/東北地方

見過ごされる世界の問題 ―
身構えず、知るきっかけに。

Hostelling Magazine Cover Interview

Lina Arashi
嵐 莉菜

PROFILE

俳優/ファッションモデル

嵐 莉菜（あらし りな）

2004年5月3日生まれ、埼玉県出身。「ミスiD2020」でグランプリ＆ViVi賞のW受賞。2020年よりViViで専属モデルとして活躍中。
日本とドイツにルーツを持つ母親とイラン、イラク、ロシアのミックスで日本国籍を取得している父親がいる。本作が映画初出演にして初主演となる。

スタイリスト：内田理菜 / ヘアメイク：富田土筆（トロン） / フォト：小林潤次（七彩工房）

悪意のない言葉から感じた葛藤──主人公と私の共通点を見つけることからイメージを膨らませた。

── 5月6日に公開された映画『マイスモールランド』は、公開前からベルリン国際映画祭でアムネスティ国際映画賞から特別表彰を受けるなど、海外でも高く評価されましたね。率直なご感想から伺えますか？

ベルリン国際映画祭の時、残念ながら私はベルリンに行くことができなかったんですけど、川和田監督が現地での上映会の時の様子を教えてくれました。日本が舞台の物語で、英語でもドイツ語でもなく全編日本語の作品なのに観客の方々がとても真剣に見てくれたようで、「涙を流しながら映画の感想をコメントしてくださる方もいた」と聞いた時は本当にうれしかったです。

── 今回、映画初出演で初主演。しかも“日本で生まれ育ったクルド人の少女”という難しい役所でした。撮影に入る前にはどんな準備をしましたか？

入管や難民を巡る問題はニュースなどで見る機会はあったんですけど、こんなに身近な問題だということは全然知りませんでした。なので、この作品を通してクルドの民族や文化、歴史を知っていったという感じですね。
オーディションの前には主人公のサーリャと私の共通点を見つけるところからイメージを膨らませました。境遇は全然違うんですけど、私も外見で「外国人」と判断されることがよくあります。映画の中でコンビニで働くサーリャが、おばあさんにかけられた何気ない「どこから来たの？」という言葉で傷ついてしまうシーンがあるんですが、私も同じような経験がありました。もちろん“悪意のない言葉”と分かっていますが、“日本を母国と思ってはいけない”というような感覚になる時があって。日本で生まれて、日本で育って、「日本人だ」と言いたいのに、そう言いきっていいのか分からない。私自身が抱えていた葛藤のようなものをサーリャも抱えていることに共感して、絶対にこの役を演じたい、と思ってオーディションに挑みました。
実は撮影前の初期の脚本では、サーリャの性格はもうすこし気が強い子という設定だったんです。でも監督と撮影前のワークショップで、私の経験を話す中で、サーリャの設定も少しずつ変わっていきました。映画の中でサーリャが友達とサッカーのワールドカップを見ている時に「どの国を応援するの？」と聞かれて答えに詰まってしまうシーンは私の実体験が脚本に反映されました。“普通に日本を応援するつもりだったけど・・・”という気持ちを隠してしまう。そういった場面は自分の過去の感情とか葛藤を思い出して演じました。

ワークショップで出会ったのは「普通」の高校生。

── 撮影前に開かれた川和田監督とのワークショップでは具体的にどんなことをしましたか？

ワークショップは本当にいろんなことをしました。脚本の読み合わせや、演技のシミュレーションをするのが主ですが、日本に暮らすクルド人のご家族にお会いして、歴史や文化のお話しや現在の状況を直接伺う機会もありました。クルド人の方のお宅に伺って、クルドの家庭料理をいただいたり。

── 映画の中にも皆さんでお食事を食べるシーンがありますよね！床にお皿を並べて食べるスタイルで？

そうです！私がお食事をいただいた時も床にお皿を並べてクルド料理をいただきました。どれも美味しかったんですけど、ご飯の上にスパイスが利いたチキンが乗っているお料理とか、塩味のヨーグルトとキュウリのスープのようなお料理がとても美味しくて！すっかりクルド料理が大好きになっていたので、映画の撮影中にまた現場で食べられるのがすごく嬉しくて（笑）。他にもご家族のお父さんが伝統楽器を弾きながらクルドの歌を歌ってくれたり、作中にも出てくる民族衣装を着てくださったり。それまで知らなかった文化に触れ合えた時間でした。その時伺ったご家族には私と同い年ぐらいの女の子がいて、すごくお母さんのお手伝いをしていたんです。私も普段母親の手伝いをしているつもりではあったんですが（笑）、でも食器を洗うとかその程度。その女の子はイチから料理を作っていて、私の“お手伝い”のレベルじゃなかったです。お食事を頂きながら感じたのは、家族の中心にお父さんがいて、お料理を作るとか水を入れたり家庭内のことは女性の仕事という慣習があるんだと感じました。

── 同年代の方と触れ合う中で、文化の異なる部分が見えてくるというのは貴重な経験ですよね。嵐さんと変わらない部分もありましたか？

そうですね、彼女とK-POPの話をしていた時に推しが一緒だったんです（笑）。それが分かった時には二人で「キャーッ！」って（笑）。実はお会いする前は少し緊張していたんですけど、LINEを交換したくらい仲良くなりました（笑）。それを“普通”と言っていいのか分かりませんが、彼女は私と変わらない“普通の高校生”でした。だからこそ、在留資格がないことを理由に進学できるかわからないとか、他の県に自由に行けないとか、他にも大変な思いをされていると聞いた時は、胸が苦しくなりました。撮影に向けてサーリャという役のイメージが湧きましたし、「こういう境遇に置かれた方々のことを、もっと学んでいかなくちゃいけない」とすごく思いました。

── 映画を観させていただいて、「胸が苦しくなる」という気持ち、伝わってきました。“日本の難民認定率は世界的にみても低い”とか、“就職や就学の制度が整っていない”という広い視野で問題を見ることも大切ですけど、実際にその環境に置かれた人の目線から問題を見ると、より緊張感がありました。

家族だからこそ出せた雰囲気。これからやりたいこと。

── 今回映画に登場するサーリャの家族役として、嵐さんの実のお父さん、妹さん、弟さんもご出演されていますよね。

そうなんです。全員オーディションを受けて参加しました。全員出演することになるとは（笑）。自分がお仕事をしているとこ

ろを見られたくなかったので、最初はすごく恥ずかしかったです。でも、実際の家族だからこそ出せた雰囲気もあったのかなと思います。映画の中でラーメン屋さんでみんなで食事をするシーンがあるんですけど、出来上がった映像を見たら、安心感のあるほっこりした雰囲気が出ていて、特に弟には癒されました(笑)。私の家族はテレビの再現ドラマに出演した経験はあったんですけど、今回のように本格的に役をいただいて台本通りに演技をするのは初めての経験だったんです。

── 普段のご家族の関係性は映画に出てくる家族とは似ていますか？

それは違いますね。私の家は、食事の時は話が絶えない家族で、みんなずっとそれぞれに自分の話をしています(笑)。お父さんはダジャレというか…オヤジギャクとかをずっと言ってる、ふざけた感じの父で。私たちが「もう、つまんないから…止めて！」とお願いするみたいな(笑)お父さんを止める係です。週末は一緒に外食したり、イベント事をすごく真面目にやる家族で、母のルーツが日本とドイツにあるので、イースターの時には庭にチョコレートを隠して、子どもたちで探したり、タマゴをカラフルに染めたり、クリスマスも家族で食事をしてプレゼントを開けたり。いろいろな行事で家族が一緒に過ごすことが多いのでイベントごとはいつも楽しみです。オープンで仲の良い家族だと思います。

── 嵐さんのご家族のイメージですごく印象に残っているのが、テレビ番組『メイドインジャパン』でイランに住んでいるおじいさんに日本のシャワートイレを届けにいく様子でした。その後イランの皆さんはお元気でいらっしゃるんですか？

実は、イランのおじいちゃんは私が会いに行ったすぐ後に亡くなってしまったんです。きっと『メイドインジャパン』という番組がなかったら会えなかったんだろうな、と考えたら本当に素晴らしい機会をいただけて幸せでしたね。母方のドイツのおばあちゃん、おじいちゃんはすごく元気で、今でも時々テレビ電話をしますし、コロナが明けたら「ドイツに会いに行きたいね！」って家族で話しているんです。

── ドイツ旅行、いいですね！

うちの家族はみんな旅行好きなので、よく「次、どこ行く？」って旅行の話をするんです。この前、テレビで『隔離なしで行ける国特集』というのをやっていて、みんなで見ながら「ハワイ行きたいな〜」と盛り上がりました。国内もコロナ前は毎年家族で旅行に行っていて、京都とか、石川、福井にも行きました。アクティブな家族なので、コロナで自由に旅が出来なくなって、大切な時間が失われてしまったような感覚になる時があります。

── InstagramのQ&Aで、「高校の合格祝いに韓国に行く予定だったのに、コロナのせいで行けてない」と答えられていましたよね。

そうなんです。高校に合格したら「家族で韓国に行こう！」と言ってたんですけど、入試の時からコロナのせいで行動が制限されてしまって、結局韓国に行けていなくて・・・。韓国のご飯とかK-POPがすごく好きなので、実際に行きたくて。高校三年生になってしまいましたが、今でも行きたいです！

── 他にもコロナが落ち着いたら行きたいところはありますか？

エジプトも行ってみたい！私、オカルトや都市伝説が好きで

(笑)。ピラミッドの都市伝説とかを調べてYouTubeで見てたりするので、いつか実際に行ってみたいです。海外の世界遺産は日本とは違う美しさがあると思うんです。あと、いつか世界を一周するみたいにいろんな国を巡る旅に行ってみたいです。私、時間が空くとスマホで航空券の値段とか調べちゃうんです(笑)。「○○にはいくらで行けるんだろう？」とか「こう行ったらもっと安く行けるかな」みたいに。

—— 嵐さんはオカルト、都市伝説好きなんですね(笑)。そういえば ViViのプロフィールにも「趣味：オカルト・ゲーム・宇宙・写真加工」となっていましたね・・・。

そうなんです(笑)。元々『スターウォーズ』がすごく好きで、実際に見られない世界というか、未知な世界をどんどん好きになっていって。天体とか惑星とか、想像するだけですごくワクワクするんです。オカルトも実際には目にできないけど、「もしかしたら本当にあるかもしれない」と想像したり(笑)。UFOとかUMA（未確認生物）とかエジプトの都市伝説とか。説明が難しいんですけど、自分でも何でこんなに好きなのかちょっと分からなくて(笑)、なかなか周りにわかってくれる人がいないので…今仲間を探してます(笑)。

いろんな感情の溢れる映画。
身構えずに見てほしい。

—— 家族で旅好き、ということでしたけど、旅先でのファッションにこだわりはあったりしますか？

家族で旅行に行く時は、みんなラフなスタイルですね。私は行った先の文化に合った服装をするのが好きで、イランに行った時は長袖長ズボンにスカーフを巻くんですけど、スカーフに柄を入れてちょっと楽しんだりしていましたね！フランスへ行ってパリの街に溶け込むような、ベレー帽をかぶったりとか、いつかそういう旅もしてみたいです。

—— 普段はファッション誌「ViVi」の専属モデルでもある嵐さんですが、今回俳優に挑戦してみて感じた俳優とモデルの違うところ、また似てるなと思ったことはありましたか？

モデルのお仕事はしっかりとメイクをして、いろんな女性像を演じるというお仕事ですけど、今回の映画ではナチュラルメイクというか、ファンデーションを塗るくらいだったので、「どう映るんだろう？」と最初は思いました。でも作品を見た時に、あまりメイクをしていない時の表情がとても豊かに見えたことには驚きました。モデルはお洋服にあわせて、いろんな顔になれるお仕事で、俳優は自分が経験できない人生を生きることができる。そこがすごく違うし、それぞれ魅力的ですね。
俳優のお仕事は、最初はすごくプレッシャーがあったんです。「私が足を引っ張ってしまうんじゃないか」って、現場に入ってからもずっと緊張してたんですけど、川和田監督や、共演者の方や、スタッフの方々がすごく笑顔で、優しく接してくださって。どう演じていいのか分からないシーンもあったんですけど、そういう時

は監督とたくさん話して、理解を深めていって。一つの作品を全員で作り上げていく楽しさがありました。

── 奥平大兼さんとの共演も本当の同級生のようでしたね！

撮影前にお花見をしながら共演者の方やスタッフの皆さんとの仲を深める機会があって、その時に奥平さんとは趣味の話とか、好きな音楽の話とか、映画と直接関係ない話もさせていただいていたんです。映画で描かれているサーリャと奥平さんの演じる聡太との間の信頼感のようなものは、そういう機会に得られた気がします。撮影の合間とかも、私が業界用語とか何も分からなくて、「？」って顔をしている時、奥平さんがそれに気づいて教えてくださったり、緊張している時には話し相手になってくださったり。お兄ちゃんみたいな、すごく頼りになる方でした。

── 完成した映画をご覧になってみていかがでしたか？

最初はスクリーンに自分が大きく映るのが恥ずかしかったですね（笑）。でも物語が進むにつれて、自分ではなくサーリャに見えてきて。映画に入り込んで観ることができました。演じている時には気づかなかったんですが、サーリャと聡太の二人のシーンでのサーリャが一番幸せそうな顔をしていることに気づきました。大変な状況で、聡太が、サーリャの居場所になっていたんだなと。
私もこの作品と出会って初めて知りましたが、難民の問題は遠い国の話ではないです。川和田監督が「知らないことで、（彼らを）いないことにしないでほしい」とおっしゃっていて、私も本当にそうだなと思います。でも、物語の中には、恋愛や青春の要素があって、家族の物語も描かれているので、いろんな感情が溢れでてくる映画になっています。人種や難民というシリアスなテーマですが、いろいろな環境、世代の方に共感してもらえる点があると思っています。多くの方にこの映画を観ていただきたいです。そして、この映画が今、実際に日本で起こっていることを知るきっかけになると嬉しいと思います。

嵐莉菜初主演作『マイスモールランド』絶賛公開中！

クルド人の家族とともに生まれた地を離れ、幼い頃から埼玉で育った17歳のサーリャが抱くさまざまな複雑な感情を、デビュー作とは思えないほどの堂々とした演技で、嵐莉菜が熱演！是非、劇場でご覧ください！

Story

クルド人の家族とともに生まれた地を離れ、幼い頃から埼玉で育った17歳のサーリャ。すこし前までは同世代の日本人と変わらない、ごく普通の高校生活を送っていた。
しかし在留資格を失った今、バイトすることも、進学することも、埼玉を越え、東京にいる友人に会うことさえできない。
彼女が日本に居たいと望むことは“罪”なのだろうか──？

『マイスモールランド』
出演：嵐莉菜、奥平大兼、平泉成、藤井隆、池脇千鶴 ほか
監督・脚本：川和田恵真　企画：分福
配給：バンダイナムコアーツ　©2022「マイスモールランド」製作委員会
《 第72回ベルリン国際映画祭ジェネレーション部門 正式招待作品 》

オフィシャルサイト https://mysmallland.jp/

嵐莉菜さん直筆サイン入り色紙 抽選で1名様にプレゼント！

ご応募は日本ユースホステル協会ホームページの専用申し込みフォームから！
http://www.jyh.or.jp/hm/　※当選者の発表は、賞品の発送をもってかえさせていただきます

応募締切 2022年8月末日

つづきをダウンロード（無料）

Hostelling Magazine vol.28
まとめてダウンロード

LiLiCoの映画で世界を旅しよう！…… P16

Cover Interview …… P02

嵐 莉菜

見過ごされる世界の問題――
身構えず、知るきっかけに。

おしえて！旅GIRL …… P17

Youth Hostel Pick up …… P08

リフォレ積丹ユースホステル

旅の魅力を最大限に引き出してくれるユースホステル

松島むうの晴れときどき旅びより …… P18

Hostelling Mgazine×地球の歩き方 … P12

各国の朝ごはんを知ろう！
世界の朝食 WORLD BREAKFAST

YH-GUIDE ユースホステルガイド …… P20

北海道/東北地方

FYI, from HI-Office …… P15

発行所：一般財団法人日本ユースホステル協会
編集・発行人 寺島眞
〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1
国立オリンピック記念青少年総合センター内
※本誌の情報は2022年6月20日現在のものです。
　変更になる場合がありますので、お出かけの前に現地にお確かめください。
※本誌掲載記事の無断転載を禁じます。